

W-3-2

ギャップを埋めるデフォルト表現*

松田俊介 (東京大学大学院/日本学術振興会特別研究員)

smatsuda912@gmail.com

1. はじめに

日本手話の (1) は「背が縮む」だけでなく「背が低い」も表し、(2) は「ドアを押し開ける」だけでなく、開け方を問わない「ドアを開ける」も表す。(1) は「背が低い」を表す場合であっても、その形式からまるで背が縮むという変化が生じたかのように捉えていると言ってよいだろう。同様に、(2) で「ドアを開ける」を表す場合、ドアの開け方が指定されていないにもかかわらず、まるで押し開けたかのように捉えていると言える¹。本発表はこのような「かのように」性を取り上げ、以下の点について考察する。まず、第 2 節では日本手話においてなぜこの種の「かのように」性が生じるのかを考える。次に、第 3 節では (1) およびその類例の分析を根拠に、「かのように」性の現れの一つである仮想変化表現 (Matsumoto 1996) はより広範な言語現象を含むものであることを明らかにする。最後に、第 4 節では (2) およびその類例の分析を通して、「かのように」性がどのように使用・解釈されるのかを見ていく。

(1) 背が縮む or 背が低い



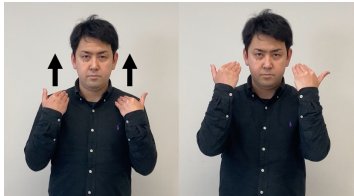
(2) ドアを押し開ける or ドアを開ける



2. 「かのように」性が生じる理由

日本手話は、《変化》を表す形式を使って《属性》——より正確に言えば、高低・長短・大小などの目で見て判断できる《相対的属性》——を表すことがある²。(1) や次の (3) がその例である。(1)(3) が相対的属性を表す場合、まるで「背が縮む」「髪が短くなる」という変化が生じたかのように描写していると言える³。

(3) 髪が短くなる or 髪が短い



また日本手話の使役表現では、働きかけを指定した形式で働きかけを指定していない意味を表すという現象が広く観察される。(2) や次の (4) がその例である。(2)(4) がそれぞれ「ドアを開ける」「電気を

* 本稿の執筆にあたり、ワークショップのメンバーや5人の日本手話母語話者など、多くの方々にご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。なお、本稿の写真に関しては掲載許可をいただいている。

¹ 日本手話 (および手話一般) は高い類像性を示す言語であり、とりわけ具体的な事象を表現するときは形式が意味をかなりの程度反映している。詳細は Matsuda (2020: §6) を参照されたい。

² 相対的属性であっても、視覚経験から直接には判断できないもの (e.g. 賢い、強い) はこれには当てはまらない。

³ 見てわかる通り、この形式はおかっぱくらいの長さしか記述できない。

つける」を表す場合、まるで「ドアを押す」「スイッチを押す」という働きかけが遂行されたかのように描写している⁴。

(4) スイッチを押して電気をつける or 電気をつける



このような「かのように」性が生じる理由の1つには、日本手話が身体を媒体とすることが挙げられる⁵。手指などを使って言語表現をする日本手話では、形式は必然的に目に見えることになる。そのため、「背が縮む」のような視覚的に知覚できる変化を表すことは容易である。問題は「背が低い」である。実際の高さを視認可能な形で示しただけでは (i.e. (1) の 2 枚目だけでは)、高い・低いといった評価を表すことはできず、「単にそのような高さである」と言っているにすぎなくなる。低いという評価を表すためには、基準よりも下方に位置するというをなんらかの形で示さなければならない。そのため、日本手話は「背が縮む」という変化を表す形式を流用して「背が低い」という属性を表すのである⁶ (松田 近刊)。また、日本手話は身体を媒体とするため、使役事象を表す場合には (2) のように何らかの仕方働きかけを含む表現が用いられることになるのが自然である。そのため、「ドアを開ける」のような働きかけを指定していない意味を専一に担う形式は生じづらい。この不在を埋めるべく、ドアの開け方を問わない場合には (2) をデフォルトの表現として流用し、「ドアを開ける」を表すという戦略をとるのである。以上の記述をまとめると表 1 になる。身体を媒体とする日本手話では、表の右下の領域が空白になっており、このギャップを埋めるために「かのように」性を用いていると考えられる。

表 1: 補充手段としての「かのように」性

	変化	属性		働きかけが指定	働きかけが無指定
日本語	背が縮む	背が低い		ドアを押し開ける	ドアを開ける
日本手話	(1)	→		(2)	→

3. 属性の中の「かのように」性

仮想変化表現とは、ある状態について、実際に変化が起こったわけではないのにあたかも変化が起こったかのように描写する表現のことである (Matsumoto 1996)。Matsumoto は、日本語の「太っている」は単純状態表現であり、仮想変化表現ではないと述べる。以下では、この考えを日本手話のデータに基づいて批判的に検討し、「太っている」を仮想変化表現と見なす分析の可能性を示す。

第一発表で述べられているように、仮想変化表現の成立において意外性は必ずしも必要な要素ではない。このように考えると、「背が低い」という意味を表す (1) は仮想変化表現の事例とみなすことがで

⁴ 仮に (4) の「スイッチを押す」部分がなければ、「自然に/自動で電気がつく」という解釈にしかない。

⁵ 媒体が言語構造に与える影響は手話言語学において盛んに研究されている (e.g. Zeshan and Palfreyman 2020)。

⁶ 背が縮むという変化を把握するには、変化前の背丈から変化後の背丈へと、対象の変化を上から下へと追いかける心的走査が必要である。同じように、背が低いという属性を把握する際には、高い・低いを分ける基準となる標準的な背丈から、対象の背丈が位置する高さへと向かう上から下への走査が行われる。このように走査の仕方が共通していることが、変化から相対的属性への流用を可能にしている。

きる。では、(3) で「髪が短い」という属性を表す場合はどうだろうか。(3) は (a) ずっと髪が短いという状態も記述できれば、(b) 髪は伸びたのだけれども依然として短いという状態も記述できる。また、(c) 髪を切った結果として現在短いという状態の記述も可能である。(a)(b) では「長い→短い」という変化が本当に起きたとみなされているわけではないのに対して、(c) では「長い→短い」という変化を経て髪が短い状態に至っていると考えられている。ここから、(c) を表すのに用いられた (3) は仮想変化表現なのか、それとも実際の変化を表す表現なのか、という問題が提起される。さらに、次の (5) も考えてみよう。(5) は「背が伸びる」だけでなく「背が高い」も表すが、背が高いという属性は通常背が伸びた結果生じるものである。(5) で「背が高い」を表すとき、これは実際の変化を表す表現だろうか？それとも仮想変化表現というべきだろうか？

(5) 背が伸びる or 背が高い



本発表では、(3c) や (5) 「背が高い」は、「変化を背景としてその最終局面を表す場合」と「変化が完全に捨象され純粋に属性だけを表している場合」との間で、様々なバリエーションを持つと考える。この主張を、認知文法における「主体化」の観点から裏付けてみたい。主体化とは、客体的に捉えられていた意味要素が徐々に希薄化し、それに伴い、もともと内在していた主体的な意味要素が顕在化することである (Langacker 1998)。例えば (6) に挙げたように、across は実際の移動・実際の移動の結果・仮想上の移動を表すことができるが、(6a) から (6c) へ向かうにつれて、客体的に捉えられていた要素——実際の物理的な移動——が徐々に消失し、それに伴って、どの事態にも共通する主体的な要素——なんらかの移動を追う概念化の主体の視線——が顕在化している。「徐々に」消失するわけだから、主体化は当然程度問題になる。これを図で表すと図 1 になる。C は概念化の主体を表し、左側の円から伸びる太い矢印は移動を表す。C から伸びる破線矢印はその移動を追う視線を表し、(6a) から (6c) へかけて太い矢印が破線になり消失していく過程は希薄化を表す。

- (6) a. The child hurried across the busy street. (実際の移動)
 b. The child is safely across the street. (実際の移動の結果)
 c. Last night there was an altercation right across the street. (仮想上の移動)

(Langacker 1998: 77, 野中 2019: 32)

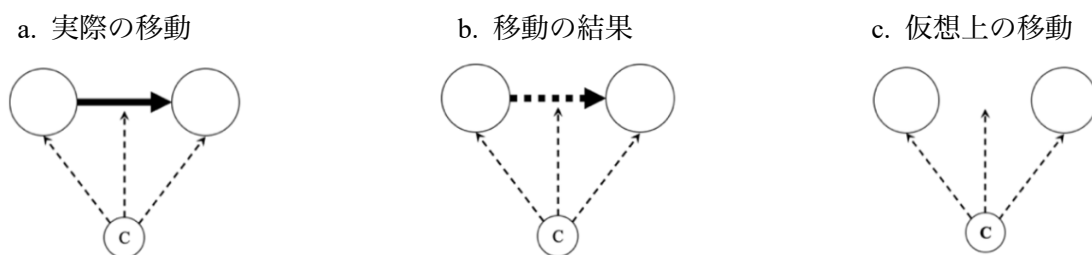


図 1 : 主体化の過程 (Langacker 1999: 298 をもとに作成)

話し手が (1) 「背が縮む」を (1) 「背が低い」に流用するとき、客体的に捉えられていた要素——実際

の変化——が希薄化することで、主体的な要素——「背の高さ」というスケール上の走査——が相対的に前景化していると言える。よって、(1)「背が低い」は主体化の事例である。(5)「背が伸びる」から(5)「背が高い」にかけても希薄化が見られるが、ここでは客体的に捉えられていた要素が(1)ほどは希薄化していない。なぜなら、背が高いという状態には普通「低い→高い」という変化を経て至るからである。この点で、(5)における主体化の程度は(6b)に相当すると言える。

以上を念頭に置くと、日本語の「太っている」は(5)「背が高い」および(6b)と類比的であることに気づく。したがって、「太っている」は(典型例ではないかもしれないが)仮想変化表現と言っても差し支えないだろう。

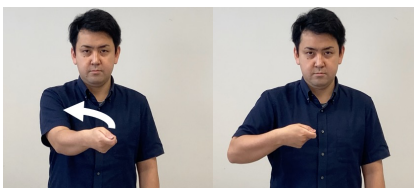
4. 「かのように」性はどう使用・解釈されるか

上では、「ドアを開ける」を意味する日本手話は常に(2)であるかのような書き方をしてきた。しかし実際は、「ドアを開ける」を表す形式は状況に応じて柔軟に変わる。言い換えれば、話し手が何をデフォルトの表現とするかは様々な知識に基づいてその場その場で判断されるということである。このことを確認するために、日本語の小説が日本手話にどう翻訳されるのか検討してみたい。小説を使って検討する理由は、文脈が把握できる分、日本手話の表現に影響を与える状況としてどのようなものがあるのかを特定しやすいからである。

4.1 話し手は「かのように」性をどのように用いるか

本発表で用いるのは『シャーロック・ホームズの冒険』『シャーロック・ホームズの思い出』(延原謙(訳))である。この小説から、ドアを開ける行為を表す箇所を抜き出し、それに対応する日本手話を母語話者に確認した⁷。すると、多くの場合、(2)の「押し開ける」でもよいし、次の(7)の「引いて開ける」でもよい、という回答を得た。例えば、(8)~(10)の下線部は(2)と(7)のどちらを充ててもかまわない(下線はいずれも発表者による)。

(7) ドアを引いて開ける or ドアを開ける



- (8) 「お帰りなさいませ。あの、お留守にお客さまがございました」ドアをあけてくれた給仕がいう。
(『シャーロック・ホームズの思い出 黄いろい顔』)
- (9) 話しながら歩くうちに、ベーカー街の家までたどりついた。さきにたつて階段をのぼっていったホームズは、私たちの部屋のドアをあけてみて、ぎくりとした。
(『シャーロック・ホームズの思い出 ギリシャ語通訳』)
- (10) まだコーヒーがきません。なんだってこんなに遅いのだろうと、不審に思って私はドアをあけて、廊下を階段の方へ歩いてゆきました。
(『シャーロック・ホームズの思い出 海軍条約文書事件』)

(2) と (7) が交換可能な理由は、(8)~(10) を翻訳したインフォーマント (以下、話し手) が (8)~(10) に

⁷ 翻訳したのは一人である。4.2 節で述べる翻訳結果の確認を行ったのは二人である。

おけるドアの本当の開け方を知らないために、一般的なドアに関する知識——家のドアは普通押すか引くかして開けるという知識——を参考にしてデフォルト表現を決めるからである。このデフォルト表現の話し手は「実際の開け方がどうであれとにかく開けたのだ」と考えている。すなわち、使役の働きかけを表すために「かのように」性を用いているのである。

一方、(2) と (7) を交換できない例も存在した。例えば、次の (11) である。この場合、(7) は使えるが、(2) は使えないという回答を得た。この理由は、「馬車のドアを外から開ける際には引かなければならない」という知識を話し手が持っているから、と考えられる。馬車のドアを外から開けるという文脈においては、「かのように」性が (ほとんど) ない (7) がデフォルト表現として選択されるわけである。

(11) 馬車が止まるのを見て、街角にいた浮浪者が一人駆け寄って、ドアをあけて銅貨にありつこうとしたが、それは同じ目当てで駆けつけた浮浪者に突きのけられた。

(『シャーロック・ホームズの冒険 ボヘミアの醜聞』)

4.2 聞き手は「かのように」性をどのように解釈するのか

ここまで、話し手がどうやって「かのように」性を使用するのかを見てきた。ここからは、聞き手がそれをどう解釈するのかを検討していく。

多くの場合、話し手と聞き手が想定するデフォルト表現は一致する。例えば、(11) を描写する際に話し手は (7) を用いるが、馬車のドアは外側に開くという知識が共有されているために、聞き手にとっても自然に響く。それに対して、想定されるデフォルト表現が一致しない場合もある。このとき、聞き手はなんらかの違和感を覚え、次のような可能性を検討する。(A) 話し手は不自然な表現をした、(B) 話し手は自分よりも詳しく知っている。それぞれ順を追って見ていこう。

(A): 仮に話し手が (11) の下線部を (2) で表すと、聞き手は不自然であると判断する⁸。他にも「風呂の電気をつける」は (4) で表すが、次の (12) を用いて表現されると聞き手は不自然であると感じるようである。これは、風呂の電気は通常スイッチを押してつけるという知識を聞き手が持っているためであろう。

(12) 紐を引いて電気をつける or 電気をつける



(B): 話し手が自身の家の話をしているときに、聞き手が想定するデフォルト表現とは違う表現をしたとする (例えば、肘を使ってドアを押し開ける)。それを見た聞き手は「話し手は本当にそのようにして開けるのだな」と判断する。なぜなら、その表現は聞き手が想定するデフォルトとは異なるために違和感を覚えるが、話し手自身の家のドアの話なので (A) の可能性が考えづらいからである。

本発表では、主に (2)(4) という少数の事例に基づき議論を行ってきた。(2)(4) 以外にも「かのように」

⁸ この判断にはインフォーマント2人とも合意している。

性が観察される使役表現は存在し⁹、その多くも上で見た記述に従うことが確認されている。

5. おわりに

本発表では以下のことを主張した。

- 日本手話では、「背が低い」はまるで背が縮んだかのように描写し、「ドアを開ける」はまるでドアを押し開けたかのように描写する。この種の「かのように」性が生じる理由の一つとして、日本手話が身体を媒体とすることが挙げられる。
- 日本手話には、実際の変化とも仮想変化とも言える表現が存在する。それは、認知文法が言う主体化という概念のもとに整理される。
- 使役表現において、話し手が何をデフォルト表現に選ぶかは、一般的な知識およびその場の文脈といった様々な要素に照らし合わせて決められる。
- 話し手が使用したデフォルト表現と聞き手が想定するデフォルト表現とが異なるとき、聞き手は (A) 話し手は不自然な表現をした、(B) 話し手は自分よりも詳しく知っている、などと考える。

なお、本発表では属性と使役に議論を限定したが、実際には身体的行為・視覚的経験の描写一般に「かのように」性が広く観察される。例えば、日本手話では水をどのようにして飲んだのか分からないときには「水をコップで飲む」を表す形式で描写する。つまり、まるでコップを使って飲んだかのように表すのである。

参考文献

- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and transitivity*, 87–120. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1998) On Subjectification and grammaticization. *Discourse and cognition: Bridging the gap*, 71–89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Matsuda, Shunsuke (2020) Iconicity and categorization in signed languages. 『東京大学言語学論集』42: 169–183.
- 松田俊介 (近刊) 「身体を使って話すとは：認知言語学から見る日本手話の現象3つ」『日本エドワード・サピア協会研究年報』35.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*, 124–156. Chicago: University of Chicago Press.
- 野中大輔 (2019) 「英語の場所格交替と形容詞的受身：主体化と好まれる言い回しの観点から」『日本エドワード・サピア協会研究年報』33: 25–40.
- Zeshan, Ulrike and Nick Palfreyman (2020) Comparability of signed and spoken languages: Absolute and relative modality effects in cross-modal typology. *Linguistic Typology* 24 (3): 527–562.

⁹ Haspelmath (1993) が挙げる動詞対に基づいて調査したところ、このような「かのように」性が広く見られた。